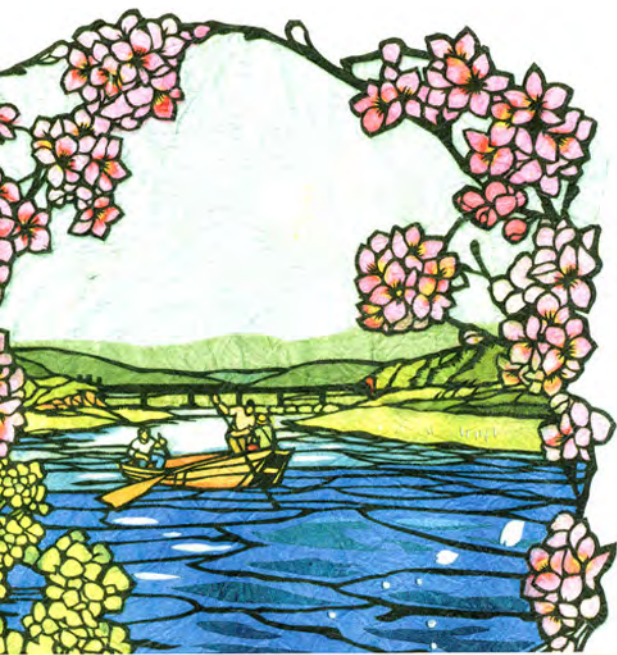


愛と死の真実

塩川香世



あなたは、これまでに自分の死を考えたことがありますか。

自分が死ぬ、人が死ぬ、

それは、どういうことだろうかと思ったことがありますか。

命が大切なのは、みんな知っています。

だけど、命とは何でしょうか？

なぜ命を大切にしなければならないのでしょうか？

どのように答えますか。

愛と死の眞実

はじめまして

皆さん、こんにちは。

今は、どのようなことも、インターネットで検索をすれば、様々な情報を得ることが出来る時代です。

いながらにして、様々な情報を入手できる利便性や楽しみを共有できる時代です。

一方では、それらがもたらす弊害も、多方面にわたって起きていることも否定できませんが、パソコンやケータイといわれる分野は、これからもどんどんと私達の日常生活の中に入ってくるでしょう。

そうなってくれば、その波に取り残されるかのように見える人達は、あたかも社会からドロップアウトしていくような風潮にありますが、果たしてそうなのでしょうか。

今、あなたの周りに氾濫はんらんする雑多な情報を、少し横に置いておいて、あなた自身が、あなたに聞いてみる、あなたの心を覗いてみる、そのような静かな時間と空間を、毎日の生活の中で、少しずつ作ってみませんか。

ケータイが手放せない、パソコンがなければ一日が退屈だ、今は、それが当たり前前の時代なのかもしれません。

だからこそ、そういうものを程々にして、もっと、自分と向き合

う時間が必要なのではないかと、私は、そう感じています。

ゆったりとして、自分の心に感じるもの、響いてくるものに思いを傾けてみませんか。

あなたの毎日は、目の前のことだけを追いかける毎日ではありませんか。

あなたは、自分を大切にしていますか。

自分のことを大切にしているようで、していない人が多いと、私は思っています。

そして、本当の意味で、自分を大切にしていかなければならない時を迎えていると思っています。

自分と向かい合わなければならぬ時が、遠からずやってくると、

私は感じています。

はじめまして

目次

- はじめまして 2
- あなたは寂しくないですか 10
- 宗教書ではありません 17
- 愛とか死という言葉から何を連想する？ 49
- 男と女の愛 53
- 親子の愛 62
- 煩惱 68
- 私達は肉の愛しか知らなかった 79

本当の愛が知りたい	89
心の奥深くに届く愛	99
なぜ、人は愛を求めるのか	106
愛すること	120
死ぬこと	133
本当の自分との出会い	146
真実を見つめて	167
愛と死を語っていけば……	183
思いに忠実に……	195

愛と死の眞実

あなたは、寂しくないですか

あなたは寂しくないですか。

ひとりぼっちを感じていませんか。

仕事も私生活も順調なのに、そして、自分の周りには、たくさんの友達がいって、毎日が充実しているはずなのに、ふつと心に空洞を感じたことはありませんか。

仕事にどれだけのエネルギーを注いでいっても、お酒を飲んで、ゴルフのクラブを振り回して、歌を歌いまくっても、または、バーチャルの世界（仮想社会）に自分をのめり込ませても、どこか、何

か冷めている自分があることを感じませんか。

安心してください。

寂しいのは、あなたひとりだけではありません。

みんな寂しいのです。

人は、根源的に寂しいのです。

寂しいから、人は、絶えず、何かを求めてさ迷っています。

そして、寂しさをストレートに表現できる人もあれば、屈折した形で示していく人もあると思います。

しかし、ここでひとつ問題があります。

人は、「自分は寂しい」ということにも、なかなか気付けない場合

あなたは寂しくないですか

が多いのです。

「あなたは寂しくくないですか」と尋ねられても、「寂しい」とすぐに答えが返ってくることは少ないのです。

それは、本当は、寂しいって、どういうことか分からない人が多いからだと思います。

分からないまま、何かにエネルギーを傾けていってしまう、何かのめり込んでいってしまう、こういうことではないでしょうか。

このまま行けば破滅だと感じていても、あえてその道を選んでしまうことだと思っています。

はたから見れば、何てバカなことと思うことも、そして、当の本人にも、なぜか分からない。だけど、どうにも止まらない、止め

られないことも、確かにあるように思います。

それでは、なぜ、人は、根源的に寂しいのでしょうか。

これが分かれば、人は、本当に寂しくなくなるのでしょうか。

私は、きっとそうなると思います。

本当に分かれば、そうです、心で分かれば、きっと根源的な寂しさに、グッドバイができると思います。

逆に言えば、そうならなければ、いつまでもどこまでも、寂しさを引きずっていくのです。

寂しさを引きずりながら、それを癒すもの、それを紛らわすものを探し求め続けるのだと思います。

あなたは寂しくないですか

愛、優しさ、温もりを、人は求めます。

しかし、寂しさを引きずりながらでは、決して本当の愛は分からない、そして、本当の優しさも温もりも分からないのです。

本当のところ分からないから、結局は寂しさを引きずっていくと、私は思うのです。

根源的な寂しさから、永久的に、抜け出すことはできないと思います。

では、「あなた自身、今、寂しくないのですか」と、誰かに尋ねられたら、私は、いったいどのように答えるでしょうか。

『全然、寂しくないと言えば、嘘になります。』

まだまだ、寂しい心、寂しい私自身がたくさんあるでしょう。

しかし、数年前の私と比べれば、雲泥の差です。

寂しさの強弱には、天と地ほどの差があります。

私は、寂しい心をつぱい抱えて生まれてきました。

しかも、寂しいって言えずにずっと存在していたことを、私は、

私の心で知ったのです。

そして、なぜ寂しかったのかを知ったから、また、ではどうすればいいのかということも分かったから、今は本当に幸せなのです。』

これが、私の今の偽らざる思いです。

あなたは寂しくないですか

ところで、私の今の文章をスムーズに読めない人もあると思います。

例えば、

「寂しい心をいっぱい抱えて生まれてきたとはどういうこと」、

「ずっと存在していたとはどういうこと」、

「心で知るとはどういうこと」、

というように、短い文章の中にも、何かなじみがないような、しっくりとこない表現があると思います。

その人達に向けて、次の章で、ほんの少しだけ説明します。

宗教書ではありません

私は、かれこれ十五年くらい、「心の学び」（これにつきましたは、この章で順を追って説明しています）」をしています。

また、この本には、愛と死の真実という何やら大げさなタイトルが付いています。

しかし、ここで言う「心の学び」についても、本書についても、宗教というものと全く無縁であることを、最初に、はっきりとお断りしておきます。

哲学とかそういう難しいジャンルにも入りません。

従いまして、どこそこの宗教団体の勧誘書ではありませんので、どうぞ、ご心配なく、読み進めていってください。

「心の学び」というからには、何か宗教だろうとか、何か難しいことをやっているのではないかとか、そう思われるかもしれませんが、そうではないのです。

確かに、愛とか心などの言葉が出てくるので、誤解されやすいし、学びというから、何か構えてしまうかもしれません。

特に、若い人達には、愛とか死とか、心とか、そんな辛気臭いしんきくさとはどうでもいいじゃない、とりあえず、今が楽しければいい、もつとしたいことも山ほどあるしという人も、たくさんおられると思います。

お金を稼いで、恋人を作って、おいしいものを食べて、好きなことをして、おもしろおかしく生きていきたいと思うかもしれません。しかし、どうでしょうか。世の中、そんなに楽しいことばかりあるわけではないですよ。

何もかも自分の思い通りにいくわけがないし、近頃、何だか物騒だし、こん畜生、あん畜生の毎日が続いていませんか。

話は戻りますが、この「心の学び」ということについて、少し説明させてください。

私には、これまでに、田池留吉氏という人を中心にしたセミナーを通して、全国津々浦々に、そして、海外にもたくさん仲間達が

います。

宗教の世界、精神世界、あるいは心理学といったジャンルに属さない、私達の学びの輪の仲間達があります。

私は、その学びの輪のことを、私達の世界と表現していますが、そこには何も特別な世界があるわけではないのです。

その輪に入ってくるのに、何も特別なものは要らないのです。

誰でもが入れる輪です。

その輪は、お金も要らなければ、地位や名誉も要らない、男も女も、年寄りも若い人も、大歓迎の輪なのです。

そして、もっと本当のことを言わせてもらえれば、その輪には、みんな、すでに入っているのです。

ただ、輪の中にいることに気付いていない人達が、今現在は大半だということです。

その人達に、入会資格も要らないし、入会金も要らない、紹介状も要らないその私達の輪を、少し覗いてみませんかとお誘いしているだけです。

覗いてみて、立ち寄ってみて、私達はあなたから何かを乞うこともありません。

また、私達の世界は、道徳、規律、修行といったもので自分の心を縛り、自分を縛っていくことにも無縁の世界です。

私達は、自由に伸び伸びと、しかし、真剣に、ただ「自分の心を見る」ことをやっていくことを学んできました。

ところで、あなたは、「自分の心を見る」ということを聞かれて、今、どのような感想を持たれていますか。

「心を見る」、何の変哲もない表現です。

しかし、「心を見る」ということを、これまでに耳にされたことがあるかといえば、案外少ない、いいえ、ないと思います。

「心を見るって、どういうことだと思いますか」

と、聞かれたときに、

「心を見るということだから、自分の今思っていることを振り返るとか、語ってみるとか、そういうことかなあ。」

だけど、自分が今、心で思っていることって何だろうか。

そういえば、私が心で思っていることと、実際に話していることとは、最初から最後まで全部、ピッタリ一致しているとは言えないなあ。

時には、全く反対のことを言っている場合もあるし……。

まあいいか、どうせ、黙っていれば、私が心で思っていることは相手に通じないのだから……。」

「なぜ、心で思っていることを、そのままストレートに話すことができない自分があるのだろうか。

私は、本当はこんなふうに思っているのに、その三分の二も、いえ、半分さえも言えないのはなぜかなあ。

ぐつと言葉を飲み込んでしまう自分があつて、いやだなあ。こんな私は苦しくていやだ。」

「何で、私は自分が心にも思つてもいないことを、こんなに口からスラスラと出てくるのだろうか。私つて怖い。他の人も、こんな感じなのだろうか。心と裏腹なことを、みんな言っているのかしら。」
　　こういうふうには、心を見るところとはどうということかと聞かれたことから、あなたの心は、様々な方向に向いて、色々な思いを発していくでしょう。

例えば、相手と会話をしている、今話題になっている事柄よりも、どこか違うところに、自分の思いが向いていることを感じたこととはありませんか。

「心」ここにあらざうという言葉にもあるように、「心」は、絶えず動いているのです。

朝、目が覚めて、一日の活動をし始めると、目から耳から色々な映像や音が、自分の中に飛び込んできます。

そういうものを見て聞いて、あなたの心は、絶え間なく動き続けているのです。

ということは、あなたは、知らず知らずのうちに、様々な思いを出しているのです。

実は、言葉によって、その思いを伝えなくても、もうすでに、自分の心から発せられた思いは、エネルギーとなって放出されています。

いくら言葉で修飾しても、言葉で伝える思いとは別の思い（波動）が流れ出ているのです。

この仕組みが、ほとんどの人にはまだ、理解されていません。

黙っていれば、相手には分からないと思うかもしれませんが、黙っていても思い（波動）は流れています。

また、言葉を重ねることによって、自分の思いは相手に通じているとか、相手を説き伏せることができるとか、納得させることができるとか、そのようにも考えておられると思います。

もちろん、そうすることによって、通じる話もあるし、説き伏せたり、納得させたりする内容の話もあります。

それはそれでいいのです。

所詮、その内容は、形の世界のことだからです。

しかし、本当のことはというと、例えば、本当の優しさであるとか、温もりであるとか、喜び、幸せ、愛などというものは、とても人間が用いてきた言葉などでは、言い表すことはできないのです。つまり、こういうことです。

言葉に乗せて、思い（波動）が流れます。

言葉を使っている人の思い（波動）が、確かに流れます。

そして、問題は、その流れている思い（波動）はどうなのかという事です。

言葉で喜びとか愛を表現しているけれども、果たして、それは真実の喜び、真実の愛を語っているのかどうなのかということなのです。

結論は、本当のことは、真実は、言葉で伝えることができな
いうことです。

なぜ、そう言えるのでしょうか。

世の中は、形で示された世界が本当の世界だということから成
り立っています。

形で示された世界というのは、目や耳や鼻や舌、皮膚で知る世界
です。

特に、人は、目で見て、耳で聞いた情報を基にしていきます。

そして、自分の考えや思いを相手に伝える手段として、言葉を使

います。

確かに、生活を営んでいくために必要なことは、言葉にしないと正確に伝わらないでしょう。

中には、互いに言葉に出さなくても、互いの調子や気持ちが一致するとか、思いは通じ合っているということ、阿吽あうんの呼吸ということや、以心伝心ということもあります。

しかし、それらもまた、所詮は、形で示された世界の中のことです。その世界を本物としています。

ところが、そうではなくて、本当に、思えば通じる世界というものがあるのです。

その世界には、形で示されたものが本物だという思いはありません

ん。形はなく、ただ「思い」があるだけの世界です。

ここで、少し自分のことを言わせていただくならば、ほとんどの人が、形の世界が本物だと疑うことがない中で、私は、思えば通じる世界だけが本物だと思っています。

確かに、目に見えて耳に聞こえて、触れることができる現実が、ここにありません。

しかし、それは、私が本当に知りたかった世界（意識、波動の世界）を、自分の心で知るために、私自身が用意してきたものに過ぎないことを、私は感じているのです。

そのために、必要なものは自分の周りに現れて、そのために、必

要でないものは、消えていくのだと感じています。

だから、目の前に現れたからどう、消えたからどうということに
対するこだわりは、薄くなりました。

そして、現れた、消えたよりも、現れたときの自分の心、消えて
いったときの自分の心の動きを、しっかりと見つめていこうと思う
だけとなったのが、「心の学び」を続けてきた結果です。

目に見えること、耳に聞こえることよりも、自分の心で感じ、自
分の心に響いてくるものを道しるべにして、これからの時を刻んで
いこう、そうすることが、私自身が本当に知りたかったことだった
という結論に至っています。

再び、「心の学び」へ話を戻します。

確かに、学びの輪は、今現在、大きく広がっていますが、今の自分の生活なり、環境の中に留まっている人が大半です。

目に見えて耳に聞こえる現実を前にして、自分の心で感じる世界を主にしていくことは、確かに難しいです。

夫であるとか、妻、親や子、そして、その他の自分を取り巻く人との繋がり、あるいは環境に比重を置きながら、心の学びをやっくいこうとする人達が多いのも無理のないことでしょう。

そして、世の中を見渡せば、そのような人、人、人です。

たとえば、思いは通じるとか、願いは届くとか、そういうことを信じている人も、思いの世界（意識、波動の世界）がすべてだとは思

っていないのです。

やはり、形で示されているもの、そして、それらは、自分達の五官、つまり目、耳、鼻、舌、皮膚で確認されるものですが、その確認がなければならぬ、確認がほしい、確認があつてこそ信じられる、ほとんどすべての人が、そう思っているのではないのでしょうか。

そのような中で、目や耳などの五官で確認される世界、つまり、形で示された世界は、実は、影の世界であり、本当の世界ではないということ、私達は学ぶ機会を得たのが、今という時間でした。

しかも、それは自分の心でしか分からないことなので、どうぞ、心を見ていくことをやっていきましよう、と、田池留吉氏が伝えてくれたのです。

もう少し、思いの世界（意識、波動の世界）ということについて、語らせてください。

私達から出てくる言葉や、態度には、その本もとになる思いがありません。

何かを思っているから、あるいは感じているから、私達は、それを言葉や態度で示していくのです。

その思いの世界を、意識の世界、あるいは波動の世界と言ってきました。

その世界を、あなたが「心を見る」ということを通して、あなた自身の心で、じっくりと感じていきましようということなのです。

どんな言葉を吐いてもいいし、どんな態度を出してもいいのですが、その言葉を吐いた、その態度を示した、その時の自分の思いを辿っていいこうということです。

言葉を吐き、態度を示したときに、どのような思いが心に上がってきたのかを確認するのです。

あるいは、何も語らなくても、態度に出さなくても、相手に対して、あるいは物事に対して、瞬間的に心に突き上がってくる思い、エネルギーを感じるはずですよ。

それを、自分の中で追っていいこうということなのです。

人は他人^{ひと}を騙せても、自分を決して騙せません。

顔で笑って心で泣いて、顔で笑って心でこん畜生、そうであるな

らば、その泣いた自分、こん畜生の自分が、波動、エネルギーとなつて流れていく世界が、本当の世界であると、私は感じています。

実は、「心を見る」という学びが、宗教や精神世界、心理学といった分野ではないという所以ゆえんがここにあります。

人は、なぜ、神、仏の道を究めようとか、心理学や哲学を学ぼうとするのでしょうか。

道を究める、学問をするといつても、結局、そういうもので自分を高めていく、立派にしていく、自分の格付けをしようということだと思います。

あるいは、そういうもので、自分を救ってほしい、解決方法を見出したいということだと思えます。

難解な仏典、経典、書物を読みこなしても、所詮、それらは知識
でしかありません。

しかし、知識だけでは本当のことは分からないのです。

人の頭脳には限界があります。

だから、人は、さらに、修行を積むのでしょうか。

そして、心が救われた、心が洗われたようだと感じても、そのあ
なたが言う「心」とはどのようなものなのでしょうか。

「心」の実体が、そうすることによって、解き明かされていないこ
とは、これまでの歴史が証明していると思います。

そこで、私は、

『本当のことは、頭では分からない。』

本当のことは、姿、形、言動でも分からない。

本当のことは、あなたが感じていくしかない。

そして、本当のことを、あなたが感じていくには、「心を見る」実践しかありません』

と、強調します。

さうして、

『宗教や精神世界、哲学、文学、心理学、科学の分野では、私達人間の本質を解き明かすことはできません』

と、はっきりと言います。

つまり、

『「心を見る」という実践がなければ、何も分かりません』と、重ねて強調します。

そして、結論は、

『私達は意識です。今、私達は、肉体という形を持っているけれども、私達の本当の姿は、目に見えないものなのです。』

このことが、自分の中ではつきりと信じていることができるように、心を見ていきましょう』

ということですよ。

もう少し、説明を加えれば、

『私達は、心として、エネルギーとして存在し、決して消えてなくなるものではないのです』

ということですよ。

確かに、この肉体は、時が来れば消滅します。それを私達は、死と呼んでいます。

しかし、死というのは、私達にとって、今の肉体を脱ぎ捨てるひとつの行事にしか過ぎないのであって、死んだから、その人が消えてなくなるのではなくて、その人が纏まとっていた肉体というものがなくなるだけなのです。

やがて、また、私達は別の肉体を携えて、この形の世界に出てく

るのです。

このような循環を、人は転生と呼んできました。

それでは、

「なぜ、私達は転生を繰り返してきたのでしょうか」

「私達にとって、この肉体というものはどういう意味があるのですし

ようか……」

ということが続いていくのです。

これらに関しての詳しい内容については、UTAブックさんから、すでに九冊の本が発行されていますので、そちらのほうを、ぜひ参照してください。

特に、「意識の流れ」「続 意識の流れ」「意識の転回」を読まれる

ことをお褒めします。

その上で、あなたが、「心を見る」ことを実践されていけば、色々
と自分の中で疑問が出てくると思います。

あるいは、日々の生活は生活としてあるけれども、ただ、一日一
日を過ごしていく中で、何かそれでは飽き足りないものが、自分の
中に起こってきていることを感じてくると思います。

その自分の思いに素直になって、自分に聞いてみることをしてい
きませんか。

例えば、

「自分はなぜ生まれてきたのか」

「自分の人生とは何だろうか」

「本当にこのまま死んでいった方がいいのだろうか」

そのようなことを考えてみませんか。

中には、その解答を求めて、これまでにあらゆる書物を手に取ったり、色々な人の話を聞いたり、様々なことに思いを傾けてこられたりという人もあるかと思いますが、そのような方も、ここで、一度、「心を見る」ということを始めてみてください。

きっと、それに対する解答に、自分の中で出会えると思います。

「人生、色々だ。生きていけば色々あるさ。」

それは確かにそうでしょう。確かに、それぞれに人生は展開して

いきます。人生色々です。

しかし、そういう一見、達観したような、そして、一方では諦め気分で、自分の人生を眺めるのではなくて、もう少し、自分に対して真摯な思いを向けてあげることをしてみませんか。

私は、この学びは、宗教ではないと言いました。

そのほんの一端かもしれませんが、次のようなことも、参考までに知っておいてください。

私達の学びには、教祖、指導者、後継者、そういうものは存在しません。

また、組織として動いてきたわけではありません。

私達には、引き継ぐ具体的なものは何もありません。この学びには財産もなければ、後継者もないということです。

過去、田池留吉氏という人を中心にセミナーが開催されてきたことは確かですが、この人は、私達の教祖、指導者という立場ではありませんでした。

本来、そういうものは必要としないのです。なぜならば、私達人ひとりが、偉大なる存在だからです。しかし、何をもって偉大だと言っているのか、そのところが大きなポイントなのです。

そのポイントは、私達の言葉で言えば、その人の土台です。土台が肉、形にあるのか、それともそうではないのか、それが、生きていく方向を、左、右へと振り分けていきます。

ほとんどの人は、自分というものを知りません。目に見えている姿、形を指して、これが私、これが自分だと思っています。そして、家柄であるとか、頭脳、美貌、財産等々に恵まれていれば、それらを全部引つくるめて、これが私だとそびえ立つのです。

そのようなものをみんな取り外して、人間裸になれば、みんな同じではないでしょうか。

いいえ、見目麗みめうるわしい人もいれば、そうでない人もいるよということかもしれません、やがてそういうものも、朽ち果てていくのです。

脳細胞も一日一日、衰えていきます。

由緒正しき家柄も、豊かな財産も、いつ何時、どういふことで傷
がつけられたり、失われたりするかわかりません。

とにかくそういうものは、流動的なものです。

第一に、それらは、自分が死んでいくときに、持っていけないも
のばかりです。

では、死んでいくときに持っていけるものがあるのでしょうか。
私は「ある」と答えます。

そして、本当に死んでいくときに持っていけるものがあるのだろ
うかと思っっているあなたに、それを、自分自身で解き明かしてい
た
だきたいと思っています。

どうぞ、本書をきっかけにして、あなた自身、本当の自分を知っ

ていく方向に進んでもらえればと思うのです。

本書によって、初めてこのような世界があることを知った方も、そして、これまでずっと学び続けてこられた方も、ともに、真実の方向へ、心に向けてまいりますよう。

愛とか死という言葉から何を連想する？

愛……。

そして、死とは……。

両方とも、漠然としているものかもしれません。

あるいは、人によっては、それらについて、はっきりと自分の思いを持っておられるかもしれません。

世の中には、愛を語る小説、物語も、愛をテーマとした映画、演劇、歌なども数知れずあります。

古今東西、愛は、私達の永遠のテーマになってきたと思います。

愛とか死という言葉から何を連想する？

そして、一方、死についてはどうでしょうか。

あまり深く考えたくないという思いが強いのではないのでしょうか。

しかし、考えてみれば、私達は、一日一日、死に向かって生きています。

いつかは、私達は、みんな死んでいきますが、死を思つて、日々にちにちの生活を過ごしている人達は決して多くはありません。

明日をも知れない命の瀬戸際にある人達は、死に対して何らかの心の準備を整えているかもしれないかもしれませんが、それも死を達観するといふよりも、やはり死に対する恐怖の思いのほうが強いでしょう。

ましてや、年齢も若くて、身体からだも元気な人には、死はまだずっと先の話です。

自分のこととして実感が無いのは当たり前です。

しかし、今は、何が起こっても不思議ではない世の中になってきました。

まだずっと先の話だと思っても、死はある日突然やってくるかもしれません。

愛も死も難しいテーマかもしれませんが。

一度、それらについて、あなたも考えてみる時間を持つてみてください。

日々の生活の時間は、慌ただしく流れているでしょうが、あなたの中にある時計の針を、少しゆっくりと動かして、思うところを考える

愛とか死という言葉から何を連想する？

とか、そのような時間と空間に、自分自身を誘われてはどうかでしょうか。

さて、あなたは、愛という言葉から何を連想されるでしょうか。また、死という言葉からはどうでしょうか。

以下の章より、私自身が、そういうものと関連して浮かび上がったきた思いを語ることにします。

男と女の愛

この世には、男の機能を備えた肉体と、女の機能を備えた肉体があります。

性同一性障害とかいうのもあって、なかなかややこしいですが、身体的特徴は、このふたつです。

その男と女、あるいは同性の間で、色々なパターンのドラマがあります。

形式は、夫婦、事実婚、不倫、同性愛と、様々です。

いわば、それぞれが愛の物語というものでしょうか。

いいえ、愛の物語というのは正しくないでしょう。

正しくは、愛憎の物語でしょう。

私は、そう思っています。

永久とわに君を愛す、誰よりも君を愛す、情熱的にあるいは静かに愛の時間を重ね、身体からだを重ねても、それだけでは、愛の物語が「憎」抜きになる、つまり、本当の意味で愛の物語となることは決してないと思います。

身体的に、精神的に、どんなに満足感があっても、そこに生じる愛には「憎」が付いて回ります。

愛いとしい、愛しているよ、ともに生きていこう、いい言葉のようですが、その裏側には、恐ろしいほどのエネルギーが隠されているの

ではないでしょうか。ご存じですか。

愛するがゆえに裏切りは絶対に許さない、愛するがゆえに愛する人も、そして、自分も追い詰めてしまう、愛深き人の心の底には、このようなエネルギーが渦巻いているかもしれません。

それらのエネルギーが、特異な形となって表面化して、男と女の修羅場があるのでしょうか。

人間の奥深くに眠っているエネルギーが、何かのきっかけで表に飛び出してくるのです。

愛を誓い合った成れの果ては、互いが互いを殺し合うほどのエネルギーで、自爆していくということだと思います。

人を愛した、心から愛した、だからこそ独占したいと、間違った

愛は、マイナスのエネルギーを、どんどん増幅させていくのではないのでしょうか。

独占したいという思いが、それを阻むものに対して、戦いのエネルギーを発していくのです。

私は、独占したいという思いは、寂しさから来るものだと思います。

人は、根源的な寂しさを抱えて存在しています。

だから、人の温もり、優しさ、癒しに、心が惹かれるのです。

そして、悲劇が起こります。

裏切りは絶対に許さないと云うけれども、間違った愛は、必ず裏切っていくのです。

裏切っていくから、その愛は間違っていたと分かればいいのですが、誰も本当の愛が分からないから、愛を求めては裏切られ、そして、裏切られてもまた愛を求めていくのだと思います。

何度、修羅場を潜り抜けても、男は女を求め、女は男を求めています。本能的な欲求とソロバンを弾いて、それを繰り返していくのだと思います。

殺し文句に踊って、熱病にうなされて、気が付けば、泥沼の愛の中にはまっていた、その悲劇が始まっています。

泥沼の愛の中に、自ら入り込み、泥沼の中で、戦いを繰り広げていきます。

しかし、自分達のいるところが、泥沼であることに、なかなか気

付けないのです。

それが悲劇なのです。

泥沼の中にいることを知って、そこから這い出してくることを試みる、それをしていけば、「憎」の部分が、段々と小さくなっていくのだと思います。

さて、泥沼の中にいることを知って、そこから這い出してくることを試みるということですが、では、具体的にはどうすればいいのでしょうか。

もっと優しくなっていけばいいのでしょうか。

もっと、愛していけばいいのでしょうか。

いいえ、そのようなことができるはずがありません。

優しくなっただけが分らないからです。

人を愛することが分らないからです。

本当の優しさも温もりも知らない男と女は、互いが互いの寂しさを埋めてくれるようにと、貪欲に求めていきます。

求めた結果、エネルギーが強いほうが、弱いほうを飲み込んでいくのです。

心から愛した、死ぬほど愛した、誰よりも誰よりも愛した、そのような激しくて熱い二人だけの愛の世界なのに、なぜ、それが永遠に続かないのでしょうか。

それは、果たして、本当に愛の世界だったのでしょうか。

少し、局面を変えます。

夫婦の仲が睦まじく、契りの堅いことを四字熟語で、偕老同穴かいろうどうけつと言います。

偕老同穴かいろうどうけつ……、生きてはともに老い、そして、死んでは同じ墓に葬られる、それが夫婦仲睦まじき姿だそうです。

他に、比翼連理ひよくれんり、琴瑟相和きんしつあいわという四字熟語もあるようです。

世間では、仲睦まじき夫婦としてある姿も、本当の愛を忘れ去つた夫と妻、男と女が、本当の意味で、二人がひとつになるには、難しいものがあると思います。

いいえ、二人が真実を知らなければ、本当の意味で、二人はひとつになることはできないのです。

世間では、共白髪ともしらまでの睦まじき夫婦として通用しても、真実の世界には通用しないことを知っていかなければなりません。

腐れ縁というのが、ピツタリな夫婦、男と女の関係が数多くあるのが、現実の話だと思います。

今では、夫婦別寝とかいう言葉もあつて、付かず離れずが、いい関係を保つていくようですが、それも本当のところはどうなのでしょうか。

親子の愛

ある程度、年齢を重ねていくと、自分の親を思うときが多くなる
と思います。

また、自分自身が結婚して父親、母親の立場になってみて、改め
て自分の親を思うこともあるでしょう。

親父さんもいいですが、ここではお袋さんにスポットを当てたい
と思います。

ドラマで見たシーンを思い出します。

それは、刑事が犯人を落とすとき、故郷くわにのお袋さんに話が触れるシーンです。頑かたくな犯人の心のヒダがほぐれる瞬間です。

お袋さん……、誰の心の中でも琴線に触れる部分です。

そして、一方では、クソババアと叫びながら、親を殺す子供もいます。

お袋さん……と呼ぶ心、クソババア……と叫ぶ心、そのどちらも、どなたの心にもある思いです。

人間は、その二面性を持っているのだと思います。

男と女の愛には、必ず「憎」の部分が付いて回ると同じように、親と子の愛にも両極端があるのでしよう。

また、親は無条件に我が子は可愛いと思いますが、すべての子供に平等に愛を注いでいるわけではないかもしれません。

どの子も可愛い、そう思う思いと、この子だけはなぜか憎たらしい、それで悩んでいる親、特に母親が案外多いのではないのでしょうか。

二面性を持つ人間の心の中、果たしてどちらが本当なのでしょう
か。

私は、どちらも本当であって、どちらも本当ではないと思つて
います。

親父さん、お袋さんを大切に思う思いと、クソが付いたり、極道
したり、拳句の果てには殺してしまったりする心が同居しています。

一方で、無条件に我が子は可愛いと溺愛する心と、我が子がうつとうしくて仕方がない、だから邪険にする心が同居しています。

それが二面性を持つ人間の心です。本当であつて本当ではない人間の心です。

その二面性の心の中で、親と子の間の思いが入り乱れて、色々な結果を生み出していきます。

みんな、自分の本質を忘れ去つた結果が、親の立場から、そして、子供の立場から、噴き出してくるのです。

親と子が、本当の愛で、自分達の中を繋いでいくためには、それぞれが、本当の自分を知り、感じていく以外にないのです。

そして、本当の自分と出会つていったならば、親子の間柄だから、

どんなことも許されるという甘えや、私の言うことを聞けという一方的に牛耳るぎゅうじ思いやわがままは、どこかで修正されるのです。

そうなっていけば、今、社会現象として起こってきているような特異な事件には至らないはずです。

誰も、本当の自分というものを知らないから、様々な環境が引き金となって、心に蓄えてきたエネルギーが暴発していくのでしょうか。親子間もそう、男と女の場合もそう、自分の中のエネルギーが暴発していきます。

未然に防ごうと思っても無理です。

そして、自爆して気付けることもあるのです。

自爆しては、元も子もないといわれるかもしれませんが、本来の

私達には、形はありませんから、自爆しても、自分というものはなくならないのです。

自分を含めて、どれだけ形の世界が崩れていこうとも、その中において、自分の出してきたエネルギーを感じ、自らの過ちに、自らが気付いていったなら、それでいいだけです。

すべては、自分のエネルギー、つまりは自分自身を知っていくためにあるからです。

煩悩

男と女の愛憎のドラマも凄いです、血で血を洗うドラマも凄いです。

そのようなドラマを数限りなく、性懲りもなく、繰り返してきたのが、私達人間です。

そのような人間達が、滝に打たれ、山を駆け巡り、眠らず、食べずの修行をして、あるいは、身を清め、心静かに写経など嗜んでも、煩悩を断ち切ることなど絶対に不可能です。

人間は愚かな生物なのです。

生まれてきて、煩惱が芽生えるのではなくて、煩惱を持って生まれてきます。

生まれる、肉体を持つとは、そういうことです。

そして、また煩惱を抱えながら、死んでいくのだと思います。それが、これまでの私達の転生の歴史だと思っています。

「いいえ、違う。」

確かに私達の転生はそういうものかもしれないが、その中で、悟ったとされる人もいただろうし、迷える衆生を救うために形を変えて、この世に現れたとされる化身けしんという話もあるではないか。」

「あなたは、本当にそのようなことを信じておられますか。

信じておられるとしたら、何を証拠に信じておられるのでしょうか。

文献ですか、それとも、どこかの偉い人の話ですか。

本を読んで、人の話を聞いて、ただそれだけで信じられるもの
でしょうか。

実際にその人達と接触して、直接にその人達から話を聞いたり、
あなた自身の目で確かめられたりして、初めてなるほどそうだと納
得するものではないでしょうか。

しかも、現代のように、科学技術万能の時代に、文献であるとか、
言い伝えだけを鵜呑みにするなんて、何かちぐはぐな話ではありま

せんか。」

「いいえ、科学だけでは解き明かせないのが、人間の心の世界ではありませんか。神とかの目に見えない世界は、人間には分からない、神のみぞ知る神秘的な世界です。」

そうです。目に見えない世界は、科学のみならず、宗教や心理学、文学などでは解き明かせないのです。

しかし、私達には、その目に見えない世界のことを知っていく能力があるのです。その能力は、最初から私達には備わっていました。

しかし、それは諸刃もろはの剣つるぎだったのです。

その能力を研ぎ澄ますためには、煩惱というものをしっかりと見
つめていかなければならない諸刃の剣を、私達は自分に用意しまし
た。

煩惱の中で、決してそれに溺れずに、煩惱をしっかりと見つけて
いくことが、目に見えない本当の世界を知っていくことに繋がって
いくのだと思います。

そして、煩惱をしっかりと見つけていくには、自分の心を見る以
外に方法はありません。

山を駆け巡っても、世捨て人になろうとも、煩惱というものから
解放されることはありませんでした。

逆に、心をしっかりと見つけていけば、目に見えない本当の世界

が自分の心で分かっているいき、自分というものが、はっきりと見えてきます。

そうすれば、自分の中の様々な欲、いわゆる煩惱という実体も見えてくるということなのです。

だから、「心を見る」ということは、凄いいことなのです。

心を見ていけば、煩惱は断ち切るものではなくて、自分の中で解き放していくものだということが分かってくるからです。

煩惱は、いわゆる肉体を持った私達の本能です。

しかし、本能のなすがままでは、社会が成り立ちません。

社会が成り立たないということは、私達は、心を見る場を得られ

ないということですから、決してそういうふうにはなっていない。ま

ん。
そこで、私達は、他の生物いきものとは違って、理性いせいというものも同時に備えています。

煩惱を抱えた人間は、理性を上手にコントロールして、一方では、自らの学習能力を高めながら、時の変遷へんせんとともに、複雑な社会を作っています。

その中で、「心を見る」ことをやっていくというのが、私達人間の本来の姿なのです。

しかし、何度も言うように、人間は愚かな生物いきものです。

実際には、諸刃もろはの剣つるぎを自分に用意しておきながら、その剣つるぎでもつ

て自分を殺してきたのです。

自分を殺す剣つるぎを自分で用意する、見方によっては、愚かです。そして、それほど覚悟というか思いを込めて、私達は、生まれてきたと見ていけば、私達人間というものは、凄いと思いませんか。

ひとつ間違えれば、死です。

自分と刺し違える覚悟がなければ、本物は見えてこない、私は今、そのように感じています。

人間の煩惱、欲のエネルギーが、様々なドラマを生み出していくことは、どなたもご存じのはずです。

そのエネルギーの渦の中に巻き込まれて、幾度となく失敗してきた人間が、今度こそはと、その中に身を置きながら、心を見ること

をやっつけていこうとしたのが、今の時間なのです。

過去には、心を見るところということが分からなかったから、ただ煩惱を滅却めつじやくすれば、悟りが得られるなどという間違った風潮に流される人も出てきました。

文献では、確かに高僧、名僧、悟った人、愛の人となっていて、果たして、その人達の中から、本当に煩惱というものが消え去っていったのでしょうか。

その人達は、ご自分のことをどのように感じておられたのでしょうか。

そして、今、その人達は、どのように存在しておられると思いますか。

永遠の命、永遠の自分を自分だと知って、その時の肉体を捨てたわけではないと思います。

その人達と実際に出会わなくても、ふっと思いを向ければ、自分の心で感じられる、その能力が、私達には、最初から備わっていると言いました。

文献に頼らずに、また人から聞いた話を鵜呑みにしないで、自分の心で感じることを、あなたもやってみませんか。

しかし、早とちりは禁物です。

自分達に備わっているものを研ぎ澄ます、それにはまず、自分の心を見ることを始めていかなければならないのです。

自分の心を見始めることが、自分に備わっているものを研ぎ澄ますことに繋がっていきます。

本来、自分達が持ってきたものを、本当の意味で正しい方向に使っていかなければ、それは、諸刃の剣だから、自らを殺していくことも往々にしてあることを知っていかなければなりません。

私達は肉の愛しか知らなかった

男と女の愛も、親子の愛も、その他、私達人間が愛だと思つてきた愛は、たくさんあるでしょう。

しかし、私は、本当に愛といえるものは、ひとつだと思つています。

愛はひとつなのです。

愛がいくつもあるはずがありません。

では、どの愛が本当の愛なのでしょう。

男と女が描く愛でしょうか。

親と子の間に流れる愛でしようか。

愛の人が語っている愛がそうなのでしようか。

私は、そのどれもが偽物の愛だと思っています。

それは、そのどれもが肉の愛だからです。

肉の愛とは？

そして、肉の愛が偽物？

それは、いったいどういうことなのでしょうか。

肉の愛の「肉」とは、私達人間を肉という形としてとらえることを言います。

人を形としてとらえるところから、愛を考える、愛を語る、愛を
求める、そういうことが偽物なのだといふのです。

しかし、人は人を形としてとらえているから、肉の愛が偽物だとい
うのは、解^げせないはずです。

「人を愛する心、愛^{いと}しいと思う思い、慈^{いと}しむ思い、なぜ、それらが
偽物なのか。人の優しき、温もりにどれだけ心が救われてきたこと
か」と言いたいところだと思えます。

その通りです。

人と人が争って、互いに攻撃し合うよりも、人と人が愛し合い、
仲良く、ともに助け合いながら穏やかに暮らしていくほうが、人と

して幸せなものも分かっています。

しかし、本当にそうできるのでしょうか。

人と人が愛し合い、仲良く、ともに助け合いながら穏やかに暮らしていくことができるのでしょうか。

答えは、ノーです。

それぞれに、みんな性格が違います。色々な癖を持っています。色々な考え、思いがあります。

それは、みんなそれぞれに色々な背景を抱えて生まれてくるからです。

そして、生まれてきた場所の風習だとか環境に影響されて、いいえ、それぞれに抱えてきた背景が、その場所の風習、慣習、環境を

呼び水として、表面に現れてきます。

その表面に現れてきたものが、その人を形作っていきます。

それが、性格とか癖だと思えます。

そして、その骨組みの上に、自らの成長とともに社会で得た常識、知識を貼り付け、巻き付けていくのです。

そして、貼り付けたり、巻き付けたりして、小さな枠組みの中に自分を押し入れていきます。

いわば、それは小さな世界です。小宇宙の中で、みんな、我一番をやっけていきます。

そのような中で、人を愛するとはどういうことなのか、本当の愛とはどういうものなのかと、あれこれ探求してきただけなのだと思います。

います。

しかし、小宇宙ではなくて、自分の中の本当の広さを、つまり、本当の自分というものを知っていけば、今まで、探求してきたものは、何とちっぽけなものなのかということになってきます。

小宇宙の中しか知らないときは、それで、よかったのかもしれない。せん。

やがて、その中から、飛び出して、少し広い自分の世界を感じ始めたならば、自分が知ってきたものが色褪せてくるはずいろあです。

もちろん、人を形としてとらえれば、男と女の愛にも、その他の愛と呼ばれるものにも、それぞれにストーリーはあると思います。

しかし、それらは、あくまでも物語の域を超えないことが分かっ

てきます。

そして、それらは、小説や物語などの架空の世界の話ではなくて、人と人が織り成す現実の話といっても、それらもまた、やがては消えていく運命にあるものだと感じ始めるのです。

私は、私達人間というものは、小さな世界にあるものではないことを感じていきます。

あの人の心は広い、懐は深いという表現がありますが、それも、人を形としてとらえている限り、小さな世界の中で感じているに過ぎないのです。

小さな枠組みの中では、本当の愛は分からない、自分を愛し、人を愛する本当の意味は分からない、そう思っています。

人を形としてとらえるところから愛いとしい云々と思うのは、肉の愛に過ぎないということが、心で理解できれば、だからこそ、何かもつと違う目線で、人と人の関係を見ていくことができるのではないかということです。

本当の意味で大らかに、自分を見つめ、相手を見つめ、互いにもつと深い絆を感じ合えるのではないかと思えます。

ところで、あなたは、ご自分をどのようにとらえていますか。

あなたが、今見ている自分が自分だと思っっていますか。

それとも、今見ている自分以外に、自分というものがあると思っ
ていますか。

また、あなたは、自分は永遠に生きるものだと思っておられますか。

その反対でしょうか。

あなたが、自分をどのようにとらえているのか、とらえようとしているのかは、非常に重要なポイントです。

今、見ている自分が自分だと信じて疑うことがない人は、愛を間違えていくでしょう。

小さな世界の中で、愛を求め、愛に裏切られていきます。

もともと、その中で求めた愛は、存在しないからです。

あると思っていた自分に、自分が裏切られると言ったほうが適切なのかもしれません。

あると思っていた、思ってきた自分が愚かだったと言ったほうが
適切なのかもしれません。

本当の愛が知りたい

これまでに記してきましたように、私達人間の本質は、肉ではなく、意識ですというのが本当のことです。

私達には、生まれてきて死んでいくという転生があります。そして、一度転生をしてくれば、それがひとつの過去世になります。

従って、数え切れないほど転生をしてきた私達人間には、それぞれ数え切れないほどの過去世があるのです。

その過去世達に共通するものは、自分の本質が意識であることを知らなかったことです。

今世の今という時間の中で、私達は、初めて、「肉ではなく、意識だよ」と、はっきりと知らされたのです。

もちろん、私は、今、そのことを、ただ情報として得ているのではなくて、自分の心ではっきりと感じています。

ずっと長く、肉、形を本物としてきた私の過去世達の思い、つまり、私自身の思いを、少し聞いてください。

「私は、自分自身を形あるものと思い込んできました。

そこから、ずっと、愛を探し続けてきたのです。

自分の心を満たしてほしいと、愛、優しさ、温もりを貪欲に求め

てきました。

だけど、求めても、求めても愛は分かりませんでした。

正確に言えば、自分を形あるものとしてとらえていたから、愛が分からなかったということが、分からなかったということです。

だから、愛は、最終的に、私を裏切っていったと思い続けてきたのです。

そして、もうひとつ、私の誤りは、愛は無償だということが、信じられなかったことです。

いつも、見返りを求めていました。

形を本物とする心の中には、必ず、ギブアンドテイクのテイクの部分があると思います。

ギブが小さくて、ほとんどなくて、あるいは全然なくて、テイクばかりを期待する。期待するから、それに反すれば、たちまち「憎」の部分が出てくる。形の世界の中での愛は、みんなそのパターンだと言えるのでしよう。

その一方で、時には、献身的に愛を捧げてきたこともあったこと
でしよう。

我が身を捧げ、我が命を捧げ、忠誠を誓った愛の中に生きてきた
こともありました。

しかし、その結果もまた散々なものでした。

いずれにせよ、みんな偽物の愛だったからです。」

ところで、あまねく人達に幸あれと、神に祈り続けてきた愛の身体を、あなたはご存じでしょうか。

私は、祈って、願って、幸を求めることの愚かさ、空しさの中に、自分を沈め、神を呪い、神を恨んできた愚かな自分を知りました。

これだけ祈り続けてきたのに、これだけ忠誠を誓い、何もかも捧げてきたのに、私の求めるものは、何一つ与えられることはありませんでした。

いいえ、何一つ与えられるどころか、私から奪い取っていく現実を目の当たりにしたことも、数多くあったことでしょう。それでも、なかなか目が覚めませんでした。

幸せがほしい、幸せになりたい、そのように願いを込めることが、

なぜ、間違いなのか分かりませんでした。

今も、なぜ、間違いなのか分からない人達はたくさんおられると思います。

人は、一様にして、次のような思いを発しているのではないでしょうか。

「私達には、そんな大それた望みはありません。

ただ、家族の幸せや安泰を望んでいるだけなのに、ささやかな幸せを望むことが間違いなのでしょうか。

なぜ、それがいけないことなのでしょうか。

なぜ、それが欲なのでしょうか。」

あなたは、幸せがほしい、幸せになりたいと願いを込める先にあるものは何だと思えますか。

それは、本当の愛を知りたいと探し求めることについても、同じことが言えると思います。

幸せがほしい、幸せになりたいと願いを込めることも、愛を探し求めることも、それ自体が、間違いだったのです。

本当の愛が知りたいと探し求めるからには、本当の愛を受け取るという感覚がありませんか。

みんな、自分の外からやってくる、外にあるものを自分の中に入

れようとする、そのような感覚がありませんか。

また、過去世が語っているようです。

「そうです、私は、ずっと、愛を自分の外に求めてきました。

ひたすらに、一心に祈れば、思いは必ず成就する、思いは叶えられることを信じてきました。

それが高じれば、念というエネルギーに変わっていくことも体験してきたのです。

私にとって、愛とは生易しいものではありませんでした。

本当の愛を知らない心には、愛とは恐ろしい生物いきもののように感じて

きたことも事実です。

念じて呪い殺すエネルギーは、自らもまた滅ぼしていくことを何
度も体験してきました。」

様々な体験を経て、それでも、本当の愛が知りたいと、自らに肉
体を持たせてきた現実があります。

それほどまでにして、愛が知りたいということはどういうことな
のか、何度、自滅しても、また、自分に肉体を持つことを請う思い、
そのエネルギーは、いったいどこから来るのか、長く、ずっと長く、
心に留めてきた疑問でした。

肉ではない私達だった、私達には形がないということ、心で知

って、ようやく、愛が知りたいと叫び、貪欲に求めてきた訳が分かります。

長く心に留めてきた疑問が解け始めています。

間違った愛を求め続けてきたけれど、そして、それで何度も自滅してきたけれども、それがあったから、ああ、私は、本当の愛、つまり本当の自分を探していたことを知ったのです。

私自身が愛だったことを知りました。

心の奥深くに届く愛

心静かに、丹田呼吸をします。

そして、目を閉じます。

心の奥深くより伝わってくる思いのままに、キーを打ちます。

「愛とは、何でしょうか。」

私は愛、あなたも愛、私達はひとつ、

信じられるでしょうか。

あなたは、ずっと愛を探し続けてきました。

私を探し続けてきました。

実は、あなたはあなたを探し続けてきたのです。

私達は、ようやく、今ここに会っています。

私は愛です。

愛は、あなたの心、奥深くに眠っていました。

あなたは、愛が分からずに、ずっとさ迷い続けてきましたね。

だけど、それはあなたが気付かなかっただけです。

私は、ずっとあなたを知っていました。

あなたにずっと声をかけていたのですよ、

あなたは愛だよって。

ようやく、ようやく、あなたは私に気付いてくれたのです。私は、

心からありがとうを言います。

私に気付いてくれた、そして、あなた自身に気付いてくれたので
す。」

愛の心は、愛は、溢れるほどに私の中にありました。

汲めども汲めども尽きることのない愛の源泉が、私自身でした。

愛を求めてきたことが間違いの始まりでした。

私は私を捨て置いて、そして、私以外に愛を求めてしまったので
す。

私を捨てた時間は、長い長い真つ暗なトンネルの中でした。愛を
くれ、愛がほしい、愛に飢えた私は、その真つ暗なトンネルの中で、

たったひとり、叫び続けてきたのです。

呼べども届かぬ思いばかりでした。

返ってくるのは、恨みつらみばかりでした。

「これが愛を求めた結果なのか。

これが神に忠誠を誓った結果なのか。」

偽物の愛をつかまされたと、散々呪ってやりました。散々恨んで
きました。

裏切り者と罵ってきました。

「私は愛だから、心に溜め込んできた真っ暗な真っ黒な思いを吐き出すことができるのですね。

吐き出しても、それを包んでくれる私、愛に出会ったから、安心しています。」

「心をどんどん見ていくのですよ。

そして、心をどんどん自由にしておやりなさい。

自由になればなるほど、心が空っぽになればなるほど、そこは、また愛という名のあなたが湧いて出てきます。

そのあなたがまた、あなたを包んであげるので。」

永遠の時をいただいています。

永遠の愛の中に誘ってくれる自分を感じます。

私は、目を閉じて、自分を思います。

目に見える形の自分ではなくて、目に見えない私を思います。その私が、私に伝えてくれているのを感じます。

私の中から流れ出す愛のエネルギーが、仕事をしていくことを感じるのです。

「あなたは、愛だから、あなた自身を目覚めさせることができるのです。本物の愛、本物の自分と出会うために、肉体という形を持た

せていくのです。」

自分の中から響いてくる思いを、今確かなものとして、自ら享受できる喜びを、感じています。

愛を求め、真つ暗な中で自らを呪ってきた自分自身でした。

その自分をしっかりと受け止めていくことができる自分と出会えたことの喜びを、今、感じています。

なぜ、人は愛を求めるとか

世相が暗くなればなるほど、命、愛、優しさが求められます。その尊さを見つめ直そうと叫ばれます。

偽装がおおはやり大流行です。

しかし、根本的な偽装に、まだ人は気付いていません。

自分が自分だと思っている自分が偽物だとは、まだ、ほとんどの人が思っていないからです。

従って、命も永遠のものだと思っていないのでしよう。

死ねば、それで終わり、簡単に言えば、そういうことになると思

います。

それなのに、人は、永遠の愛を求めます。

自分は永遠だと思えないのに、愛は永遠に生き続けると思いたいから、人は愛を探し続けていくのでしょうか。

しかし、自分は永遠に生きるものだと思っていない人が、どうしても、愛は永遠だと信じられるのでしょうか。

愛は永遠のものだと思いたいだけなのでしょうか。

自分というものを知らない人が、愛は永遠なりという言葉を出すのは、無責任だと思いませんか。

そのような無責任な人達が、この世では、案外、悟った人、愛の人と尊敬の眼差しで見られているかもしれません。

なぜ、人は愛を求めるのか

いずれにしても、そのことを明らかにする術は、人を形ととらえる小さな枠組みの中では、見つけ出すことはできないのです。

もっと広く、もっと大きく、自分を放たなければ、何が真実で、本当の愛とはいかなるものなのかは、分かるはずはないのだと思います。

自分を放つとは、どういうことでしょうか。

あなたは、今、自分が生きている、存在していると思っている自分から、自分を解き放つということを、考えてみたことがあるでしょうか。

「とりあえず、今を何とかしていこう。今日も一日頑張ろう。一日、一日を大切に爽やかに過ごしていこう。」

そんなふうに色々と思いながら、確実に時間は過ぎ去っていきま
す。

皆さん、一日があつという間に過ぎていくことを実感していませ
んか。

人によっては、ある目標を設定して、それに向かって日々頑張つ
て、それなりの充実感、充足感は得られているかもしれませんが。

しっかりとした時間を過ごしていると思っておられるかもしれま
せんが、前にもあったように、何かふつとしたときに、妙な空虚感

なぜ、人は愛を求めるのか

に襲われることはないでしょうか。

前へ、前へ進んでいこうとしているときには、感じられなくても、やがて、達成感や充実感が通り過ぎた後、心に何か空洞を感じる時期がやってくると思います。

それぞれの世界で、どれだけ自分を磨き、自分に挑戦しようとも、そして、その結果として、達成感や充実感を満喫しようとも、それが、自分の心の奥底にある空洞を埋めるものではないからです。

空洞は依然としてしつかりとある状態です。

楽しみや喜びが一時的なものであるのと同じく、奮闘努力して得た達成感や充実感もまた、心の空洞を埋めるに値するものではありません。

しかし、それがなかなか分からないのです。

みんな、心の奥底にある空洞に気付けないまま、時間を過ごし続けてきているのだと、私は思います。

心の奥底にある空洞こそが、本当の自分を置き去りにした人間の根源的な寂しさだと、私は感じています。

だから、どんなに栄耀栄華の中にあっても、その空洞を埋めない限り、人間は、根源的な寂しさから、解放たれることはないのです。

空洞をしっかりと持った人間は、本能的に、愛を求めていきます。

愛を求めても、空洞を埋めることはできないけれども、人は愛を求めずにはいられないのです。

空洞を埋めるには、自分を放つ必要がありますが、その手段を知らないのです。

人間は、目に見えて耳に聞こえて、触れることのできる中で、何かを探し続けているだけです。

そして、なぜ、探し続けているのか、何を探し続けているのか、それが分からないままに、それでも、それぞれに、自分を賭すとものを探すのでしょうか。

しかし、その中で、自分を賭ける、自分の持てるものを注いでいく、そのエネルギーは、いったいどこからやってくるのだろうかと考ええる人は、ほとんどいないと思います。

実際に、何かに突き動かされていくかのように、自分が動いてい

く場合が往々にしてあります。

時には、神業かみわざのようなことができれば、あれよあれよという間に、その世界の頂点に上り詰めることだってあるのです。そうなることを目標にして、日々研鑽けんさんを積み重ねてきた人の中には、目標は達成されたのだから、それで成功したと思いきや、実は、そうではないと薄々感じている人もあるかもしれません。

自分の力以上のものが何か働いた、そういうことを感じている人もいると思います。

だから、神に感謝という言葉も出てくるのでしよう。

何か、目に見えない世界があることを、その人達は、そのようなところから感じていくということなのかもしれません。

なぜ、人は愛を求めるのか

しかし、所詮、形の世界を信じているから、何かを感じても、その何かが分からないままです。

そして、思いは、目に見える自分を飛躍させる方向へと向いていくだけです。

そうして、結局は、心の空洞を埋めることなく、華々しい人生も幕を閉じていくのでしょうか。

人生の幕は閉じられても、心の幕は下せないのです。

引き続き、心の空洞を埋めてくれる何かを探し続けるのです。

そのために、人は、また、生まれてきます。

そして、違う人生の幕が上がるけれども、これもだめ、あれもだめの返事が返ってくるだけで、いっこうに空洞を埋めてくれるもの

に出会えないのです。

だから、ああ、私は幸せだと思いつつも、ふっとまた空虚感というか、せきりようかん寂寥感にさいなまれていくのだと思います。

依然として、心の空洞はそのままです。

地位や名誉や財産などを、ひたすらに求めている間は、心が鈍くなってしまうている状態なので、そういうことは、感じないかもしれません。

しかし、そういう人達も、何かのきっかけで心が敏感になる場合があります。

そうなれば、より一層、自分の中でギャップを感じていくかもしれません。

なぜ、人は愛を求めるのか

自分の今の現実と、心の中の現実のギャップです。

たとえ、そうであっても、今更ながら、自分の持てるものをみんな捨てて、自分が今、直面しているものと真向かいになっていこうとするエネルギーは、すでに、自分の中で萎えてしまっているかもしれない。

これでいいのだ、そのように自分の中で納得させる以外にないかもしれない。

苦しい人生です。

社会からは一定の評価を得ても、自分を偽って、自分を誤魔化していく人生は苦しい人生です。

一方、社会悪に染まって、どんどん我が身を落としていく人生も

苦しいです。

貧困から自分の心を落とす人生、犯罪に自らの手を染めていく人生、私達は、そのような様々な人生を体験してきたはずで

す。私達は、心の空洞を何かで埋めようとしてきたけれども、結局はみんな失敗に終わったのです。

失敗を認めることができなかつたから、自分を放つことはできませんでした。

自分を放つということは、自分を崩すこと、失敗の自分を自分だと認めることでした。

失敗の自分というものを認めることなどできなかつたから、自分を放つことができなくて当然でした。

なぜ、人は愛を求めるのか

このような心の歴史が、どなたの心の中にもひしめいている状態です。

心に空洞があるということは、本当の自分を知らずにきたからなのです。

本当の自分を捨て去ってきたからなのです。

いわば、地獄の奥底をずっと這いずり回ってきたのが、私達、人間だったのです。

私は、この事実を、みんなに知ってほしいと思います。

自分の現実から、目を背けずに、しっかりと自分の過去と真向かいになることをしてほしいと思います。

心に空洞が開いたまま、ずっとさ迷い続けてきた自分達だつたと、一人でも多くの人達に、心で感じていただきたいと思えます。

そして、本当の愛、本当の自分というものを、心で感じて知って、本当に幸せな時間を過ごしていただきたい、そう思います。

さて、次の章より、愛することや死ぬことについて、もう少し、しっかりと記していこうと思えます。

愛すること

あなたは、自分を大切にしていますか。愛していますか。

人を愛するとか、愛いとしい人というのは分かるでしょう。

しかし、自分を愛しているかと、改めて聞かれたならば、さて、自分を愛するとはどういうことなのかと、考える人も出てきます。

自分は大切だ、誰しも我が身が大事なものは当たり前ではないかと思う人もありますが、我が身を大事に思うことと、自分を愛し、自分を大切にしていくこととは、違うことなのだということを、まず知ってください。

自分を愛し、自分を大切にするには、まず、自分というものを知らなければなりません。

自分を知らない人に、人を愛することはできないのです。

あるいは、自分を知らないから、人に愛を求めていくのかもしれない
ません。

しかし、自分を本当に愛しいと思えない人に、人を愛することは
できません。

もつとも、偽物の世界の中では、偽物の愛が横行していきます。

偽物の愛、愛が、世の中に氾濫はんらんしています。

しかし、偽物は偽物でしかないから、いずれそれらは色褪いろあせてく
るのです。

偽物の愛は、永遠と続きません。やがて、どこかで必ず分裂して
いきます。

自分を知っていけば、愛は求めるものではなかったことを知って
いきます。

求めずとも、自分の中から滾々こんこんと湧いて出てくる優しさと温もり
を知っていきます。

自分を愛する心、本当に自分を慈しむ心が、人を愛し、人を癒し
ていくのです。

そして、自分を愛する心、本当に自分を慈しむ心は、自分を知っ
ていくことによって、蘇っていきます。

蘇る、そうです。その心は、もともと、自分の中にあるのです。

それでは、自分を知っていくとはどういうことでしょうか。

みんな、自分を知っているようで知らないのです。

自分が自分を知らないなんて、そんなバカなはずがないと言われるかもしれませんが。

それは、みんな、偽物の自分ならよく知っていますが、本物の自分を知らないということなのです。

少し、こんなことを考えてみてください。

例えば、自分の性格とか癖を、いくつか挙げてみてください。

明るい、陽気である、いじけている、ひねくれている、嫉妬しつと深い、

素直でない、怒りっぱいなどなのです。

次に、自分の性格だからと、そこで終わるのではなくて、もう少し突っ込んで、今の自分の心の状態を見ることを始めてみてください。

明るくて陽気な性格はよくて、いじけているとか、ひねくれていたりとか云々は、どうもあまりいただけないということかもしれない。そんな人が、一応、それを横に置いて、そこから、もう少し、踏み込んでいきましょう。

つまり、自分の思いを、もう少し突っ込んで見てみる、「心を見る」ということをやってみてください。

一見、明るくて陽気であっても、本当に底抜けに明るいのでしょ

うか。

なぜ、素直になれないのでしょうか。本当は素直になりたいと思
っているのではないのでしょうか。

何を怒っているのでしょうか。何で怒っているのでしょうか。

というふうに、それは、自分の性格だ、性分だと片付けずに、そ
れによって、自分の心の奥をずっと見つめていく作業を試みてく
ださい。

そうすれば、明るくて陽気な裏側の思いが、自分の中に響いてく
るかもしれません。

案外、自分を誤魔化しているかもしれません。

また、素直になりたいのになれない苛立ちが感じられるかもしれません。

その時は、素直になれない原因を追究していつてください。

人は、心に様々な思いを秘めています。

自分の心の奥を覗いてみれば、自分であって自分でないような、そのような感覚に陥ってしまうかもしれません。

例えば、自分は根っから明るいと思っていたけれども、こんな暗い部分があったとか、恐怖の思いが怒りになっていたのかもしれないとか、自分の違う局面を知るとなると思えます。自分であって、自分でないような、しかし、紛れもなく自分だという、何か妙な感覚になるかもしれません。

多重人格の自分があって、どれが本物の自分なのかが分からなくなっていくこともあります。

結論的に言えば、そういうものは、みんな偽物なのだから、安心して、たくさんの自分を感じていけばいいのではないのでしょうか。

そうしているうちに、色々な人から、色々な出来事から、それらを通して、自分から瞬間的に出る思いを感じていくと思います。

それはエネルギーと表現したほうが分かりやすいでしょう。

自分は、心の中に凄いエネルギーを蓄えてきたと感じていくと思います。

それが、心で感じられるようになるまで、自分を見つめていくことが、自分を知っていくことなのです。

表面的に顔を出している肉、形は、その凄いエネルギーを感じていく、いわば受け皿のようなものだと思えるようになればいいと思います。

もちろん、そうしていけば、自分の心癖、思い癖が、はっきりと分かります。

そして、そういうものが自分であり、そのような自分を、ずっと嫌ってきた、疎ましく思ってきたことも感じてくると思います。

自分を嫌い、自分を疎ましく思う、それでは、自分を大切にして
いるとは言えません。

自分を愛しているとは言えません。

なぜ嫌って、疎ましく思うのでしょうか。

そのような自分であってはならない、そのような自分であるはずがないと、自分の暗い思いから、自分ながらいやだなあとと思う思いから、目を背けてしまいます。

背けずに、それを、しっかりと自分の中で確認して、自分で自分を許していくことが大切なのです。

いわゆる、自分の闇の部分、何かで紛らわせたり誤魔化したりするのではなくて、自分を自分で受け止めるということをすべきなのです。

受け止めるためには、今まで、外に向けてきた心を、自分の中に向けていく必要があります。

自分の思いを外に向けるのではなくて、中に向けるのです。愛を外に向けて求めるのではなくて、愛を中に向けて求めていきましよう。

そうです。

自分を自分で受け止めることに、エネルギーを注いでいくことが、自分を愛するということです。

自分を愛していけばいくほど、自分の中から優しさが溢れてきます。

その優しさで、その温もりで、人と接するのです。

愛してくださいと求めずとも、自分の中は愛で満たされています。ただし、偽物の愛が横行している中においては、この愛というも

のは分からないでしょう。

「愛は外へ求めるものではありません。

愛は外から与えられるものでもありません。

しかし、愛は存在します。

私達は愛そのもの、私達はひとつです。」

偽物の自分を通して、本物の愛、本物の自分を知っていきませんか。

どんなに汚れ切った自分であっても、どんなに欲まみれの自分であっても、その中には、本物の自分があり、その自分は本物の愛を知っていることに、早く気付いていきましょう。

本物の自分を知っていくことが、愛を流すことになります。偽物の自分しか知らなければ、当然、偽物の愛しか流れません。

愛するということは、自分を愛するということです。

自分を本当に愛すれば、その人から、本物の愛が流れ、その愛が人を癒し、人を愛していくのです。

それが本物のパワーです。そして、それこそ、私達が恋い焦がれてきたパワーなのです。

どうでしょうか。

自分を愛して、愛して、そして、その自分の中から、本物のパワーを蘇らせてまいります。

死ぬこと

あなたは、これまでに自分の死を考えたことがありますか。

自分が死ぬ、人が死ぬ、それは、どういうことだろうかと思つた
ことがありますか。

命が大切なのは、みんな知っています。

せつかくもらつた命だから大切にしていこう。

一日、一日を大切に生きていこう。

感謝して生きていこう。

いい言葉です。もつともだと思えます。

だけど、命とは何。なぜ、命を大切にしなければならないの。

どのように答えますか。

答えられないと思います。

死んでいく意味を知らないからです。命の意味を知らないからです。

昨今は、自殺願望の人が増えています。

死んでしまえば、今の苦しみから逃れられる、みんな消えてしま
う、生きていても悲しいだけ、苦しいだけと、絶望の中で、自ら死
を選ぶのです。

そして、その家族、近親者達は、死を選んだ人を追い詰めた社会
や企業などに責任を求めていきます。

こんな悲しい、あつてはならないことは二度と起こしてはならな
い、こんなことは私達だけで充分だと世論に訴えます。

解決策は賠償です。

死ななければならぬ状況にまで追い込んだ社会が悪いなどの言
い分でしょう。

言い分、考え方、感じ方、思い方は様々です。

しかし、その人達が、命の本当の意味を知っていれば、そして、自分というものを本当に知っていれば、自らの今の時間を断つことはできません。

どんなに辛くても、どんなに悲しくても、自分で自分の命を絶つということは、自分に対して冷酷なのです。

そして、時間を断つことができると思っっている、その思いが無知なのです。

自分の時間は、自分そのものです。

そのことを知らないから、無知なのです。

時間を断つたのは、偽物の自分です。

偽物の自分が時間を断つても、自分の時間、本当の自分は絶つこ

とができません。

だから、断つても、断つても、苦しみから悲しみから逃れること
もできなければ、それらが消え去ることもないのです。

人は、いずれ、何らかの原因で死を迎えます。

自ら死を選ばなくても、死んでいくのです。

それが肉体という物体を持つてきた私達です。

いずれ、肉体の法則に従つて、その機能が止まる時期を迎えます。

医学の進歩で、その時期を、ややずらすことはできても、本来の
肉体の法則によつて、やがてその時期はやつてきます。

どんなに頑強な肉体を持つていても、健康増進に努力しても、偽

物の自分の思い通りにはいきません。

ましてや神や仏に、延命する力などありません。

また、憎まれっ子世に憚はばかるといっわけでもありません。

それぞれが決めてきた時間があるのです。

本物の自分が決めてきた時間に従って、すべてが動いているのです。

肉体を持つという時間は、限られた時間ですが、その中において、すべきことのために、すべてが動いています。

不必要なことは、何もありません。

その限られた時間内に、肉体を持ちたい、生まれてきたかったと切望してきた思いと出会うために、すべてが動いているのです。

そのような自分の思いに全く気付かずに、人は、好き勝手な生き方をしているだけです。

死んでしまえば終わりでは、あまりにも哀れです。

死んで花実が咲くものかと、懸命に生きていくことも哀れです。

生きている喜びは、肉体を持ちたい、生まれてきたかったと切望してきた思いを感じるところから、ふつふつと湧いて出てきます。

そうすれば、苦しみや悲しみはそのためにあったのに、それを放棄していくことがどういふことなのか、そして、また、限らない欲望の中に自らが溺れていくことがどういふことなのか、今、肉体を持つ喜びとともに、自分で分つてきます。本当の自分との出会いを果たすために、自分は今、生まれてきたことが分かっていると、死

んでいくということも、自ずと分かってくると思います。

つまり、肉体という物体は、時の経過とともに朽ち果てるという法則の中にあるから、その法則に従って、今の肉体を置いていけばいいだけのこと、それが死ぬということなのだということが、心で分かってくるのです。

逆に言えば、本当の自分との出会いを果たすことができなければ、死は、やはり恐怖でしかないと思います。

命の大切さも決して分らないと思います。

本当の自分との出会いを果たし、そして、今の肉体をいよいよ捨てる時期を喜びで迎える、これが、人としての理想の形です。

死を真正面からとらえることができるのは、ただひとつ、本当の自分を心で知ることです。

それ以外には、どんなに神を信じ、祈りを捧げ、成仏を唱えても無駄なことです。

死は恐怖ではありません。

人は、天国、地獄と言うけれども、本当にそういうものがあるのかどうかは知らないでしょう。

知らない、分からない、死ねば自分はなくなる、こういう状態では、死ぬことは、恐怖以外にはないと思います。

死に対して恐怖を持っている人が、なぜ、死んで天国で喜ぶことができるのか、なぜ、天国から自分達を見守ることができるのか、

あなたは不思議ではありませんか。

第一に、天国とか地獄とかは、どこにあるのでしょうか。

みんな、天国も地獄も自分の中にあることを知らずに、肉体を捨てていつているではありませんか。

肉体を自分だとするならば、その肉体の機能が止まってしまった時点で、自分は消滅します。

間違いなくそうです。そのまま時間が経過していくにつれて、肉体細胞は腐敗します。

焼いて骨になれば、その人の存在は本当に消えるのでしょうか。

人間というものを、自分というものを、どのようにとらえていくの

か、それによって、この世的なものを含めて、何もかもが違つてきます。

「自分は死んでも、自分は生きている。」

「自分は自分の中にしか存在し得ない。」

この言葉の意味を本当に自分の心で知る、感じていくことができれば、それが、いわゆる悟りということになりはしませんか。

いいえ、悟りという言葉など出さなくても、それが人間としての本来の姿なのです。

本来の姿をどこかに置き忘れてしまったから、死ぬということに對して、物々しく、仰々しく騒ぎ立てているのだと思います。

太古の昔から、死には、この世とあの世との橋渡しの思いが込められていたと思います。

ミイラとか、埴輪はにわとともに埋葬するとか、壁画、天井画にも、その思いが表現されてきたと思います。

そして、今もまだまだ、墓、戒名、供養、命日、それらを重んじることが死者の霊を重んじることであり、それは好ましいことである、そう信じ込んでいます。

現世の契りを来世にまでという思いを込めて、死者の霊を弔う人もあると思います。

すべては、形を本物とするところから発想されています。

ここで、断っておきますが、死ねば、形はなくなるけれども、霊

魂として生き続けるという考えも、形を本物とするところから発想されています。

人間を形としてとらえているのです。

従って、そこで言われる、**靈魂**、**御靈**みたまと、私が感じている意識、波動の世界とは、全く別物です。

形を本物とするところから発想する死というものは、暗いのです。

決して、喜びには結び付きません。

しめやかにお葬式が執り行われる、いつまでも涙に暮れている、その人を偲しのぶたびに涙ぐむ、みんな暗いではないですか。

暗い中で手を合わせて、なぜ、生きる勇氣だとか、元氣、愛を感じることができるのでしょうか。

本当の自分との出会い

人はみんな、誰一人の例外もなく、本物の自分に偽物の自分を巻き付けて生きています。

しかし、偽物の自分を巻き付けて生きている、存在していることを、みんな知らないのです。

知らないで今まで来ました。

唯一、「心の学び」に繋がった人達だけが、そのことを知識として自分の中に取り入れることとなったのが、今の時間です。

その人達は、「心を見る」という情報を手に入れ、言われるがまま、

今現在、それぞれが、それぞれの生活の場で実践していつています。
「心を見る」という難しさを感じながらも、日々の生活の中で、心を見ようとしていつていることは確かです。

もちろん、「心の学び」に繋がった人達全員が、必ずしもそういうふうにはいるとは、言えないかもしれませんが、いずれにしても、「心を見る」という情報に触れたことは事実です。

あとは、それをいかに自分の中で確かなものとしていくかは、それぞれが、これからの時にかかっていると思います。

その一方で、「心を見る」ということを知らずに時を刻み、やがて、今の肉体を捨てるしかない人達がごまんといまいます。

そして、その人達が、今の時代を牽引けんいんしていつていることも事実

です。

だから、世の中、おかしくなってきたて当たり前です。

自分達はまともだと思っても、心を見ない人間、見ることを知らない人間、知っていても見ようとしない人間、みんな狂っているのです。

狂った意識が形となって現れてきます。

段々と、その様子が顕著になってくるのです。

今、その流れをはっきりと感じている人、ぼんやりと感じている人、全く感じずにいる人がいます。

そして、そのような流れの中で、人間は、自分達の知恵と力を結集させて、より良き未来を作っていくこうと、様々な分野で奮闘努力

しています。

その結果として、私達は、恩恵と弊害の両面を共有することになります。

そして、私達に、恩恵をもたらすものであっても、弊害を来たすものであっても、私達は、欲望の渦の中に存在していることに違いはありません。

偽物の自分を自分だとする思いが、欲を掻き立てるのです。

「心を見る」ことをやっていき、そして、日々の時間の中で、ゆったりとして瞑想を繰り返していけば、愚かな人間の愚かな営みが、心で感じられてくると思います。

しかも、愚かな人間の愚かな営みの中で、しっかりと心を見てい

くことの嬉しさも、また感じてくると思います。

さらに、どうしても、その愚かな自分の境界を、自分自身が越えていかなければならないことを感じてくるでしょう。

愚かな自分を営々と築いてしまったのは、他ならない自分自身だったからです。

偽物は、どんなにしても偽物にしか過ぎません。

愚かな人間とは、どの程度に愚かなのか。

持てるものを持つだけ持つても、その全部が偽物だったから、何の価値もなかったことを、人間は死んでも気が付かないほどに愚かなのです。

だから、生まれてくるたびに、何かを持つとうとします。

自分の周りにたくさん集めて、それらによって自分を埋め尽くせば、そこから何か、自分を幸せにしてくれるものを見つけることができると思いい込んで、躍起になって、色々なものを求めていくのです。

しかし、所詮、求めているこうとする自分自身が偽物だから、どれだけのものを手にしようとも、偽物にしか出会えないのです。

愛もその中のひとつです。いいえ、偽物の愛しか知らなかったところこそが、人間の最大の不幸なのだと思います。

偽物の愛は、偽物の自分の心を癒すかもしれません。

しかし、どうでしょうか。

その癒し、救いは、本当にあなたの心をずっと癒してくれて、ず

つと、あなたの心の救いとなり得ますか。

その癒し、救いは、一時いつときの癒し、一時いつときの救いにしかなり得ないと、心のどこかで知っているのではないでしょうか。

そのような一時いつときのものではなく、本当に心を癒し、心を和ませ、心を潤わせる永遠の愛、そのような愛との出会いを持ちたいと思いませんか。

いったい、どうすれば、そうなっていくのか、あなたは知りたくはありませんか。

それには、何度も繰り返すことになりましたが、まず、今の自分をしっかりと見つめることです。

自分の周りの修飾をひとつひとつ、自分から切り離して、自分を見つめることです。

まさに裸の自分と向き合うことから始めていかなければならないでしょう。

たくさん、自分の周りに持っている人は、やっかいです。

まず、その人達は、今持っているものに価値があると思っている自分の思いを見ていくことから始めましょう。

また、何も持っていない人も、やっかいです。

何も持っていないというのは、自分の意思で持たないのではなくて、持ちたくても持てない人、持つことを拒んで持っていない状態にある人と言えます。

このような人達も、それぞれに自分の思い癖、心癖は相当なものだと思えます。

それをまずは、しっかりと知ることです。

人間の心の中は真っ黒だ。

この大前提のもとで、しっかりと自分を見つめていきましよう。そして、真っ黒だから生まれてきたことを知っていきましよう。

本当の自分との出会いは、まず真っ黒な自分との出会いから始まっていくのです。

自分の姿を知らない人（真つ黒な自分との出会いがない人）に、心優しき人、心正しき人、愛深き人など、存在しないのです。

自分を形としてとらえている立場から、どんなに正義を語り、愛を語っても、それは、本当の正義でもなければ、本当の愛でもないことを、その人達自身が、自分の心で気付いていかなければならないと思います。

昨年から、日本の国において、偽装が^{おおはやり}大流行です。

今はまだ、偽装は、食品等の目に見える世界のことですが、世の中は、偽物の正義、偽物の愛が蔓延^{まんえん}している状態です。

偽物ですというメッセージが、次から次へと私達人間社会に呼びかけてくるのです。

その呼びかけは、警告ととらえてもいいかもしれませんが。

それは、形を本物としている人間社会には、確かに厳しいもの
でしょう。

しかし、その厳しさは、本物と出会いたい、もう偽物のままでは
どうすることもできないと、切実に自分達に訴えている自分達の悲
鳴だと言えると思います。

「形としてとらえるところから、心で感じる方向へ行きましょう。
そうしなければ、何も分かりません」

というメッセージが、それぞれの現象に込められていると、私は
思うのです。

それは、厳しいし、なかなか容易くは受け止めることは難しいか

もしもありませんが、そこに、何とも言えない優しさを感じます。

私達はみんな間違っただけで、偽物の自分が本物の自分に深々と頭こゝろを垂れることから、本当のことが始まるのではないかと、今、思っています。

なかなか、深々と頭こゝろを垂れることは難しいことも承知の上で、それでも、やはり、そうしていくことが、そうしていくことだけが、自分を幸せに、喜びに導いていくのだと感じています。

今の自分をしっかりと見つめていけば、自分に自分が頭こゝろを垂れるその時期も、遠からずやってくることが感じられます。

ごめんなさい、間違っていましたと心の底から懺悔ざんげする機会を、みんなそれぞれに用意していきます。

心の底からの懺悔ざんげです。

愚かなことを性懲りしょうごりもなく繰り返してきた人間に、心の底からの懺悔ざんげの機会をもたらし、それは当然のごとく、大変な現象だといふことです。

大変なことが起こってこなければ、もはや、気付くことができなくなってしまう現実を直視していきましょう。

今は物騒な世の中です。

いわゆるキレル人種がうようよしています。

何かちょっとした些細ささいなことでキレます。

自分の思い通りにいかないことがあるれば、人を殺すことも平気でやっつてのけます。

僅かな金品のために人の命を奪っていきます。

己の欲望のために、人を蹂躪じゅうりゃんしていきます。

その手段、方法は、インターネットを通じて事細かに教えてくれます。今はそのような世の中です。

そして、その一方では、人の命の大切さ、尊さを訴え、愛を叫んでいます。しかし、それだつて疑わしいものです。

確かに、罪を犯す人達は、心の中の闇の部分が表面に現れてきている人達だと思えます。

その人達がどのような家庭環境の中で育ったか、そうなるべき境遇であったのか、ひとつひとつ追跡していけば、気の毒な事情もあるかもしれません。

そうなるべくして起こってきたことかもしれません。

しかし、現に罪を犯し、人を傷つけたり、人の人生を狂わせたりしてしまいました。それはそれで償うべきことだと思います。

それはそれとして、では、罪を犯して刑に服する人達と、模範的なもつともらしいことをとうとうと語り、愛を静かに、そして、時には熱く語り、人を愛することの大切さ、命を尊ぶことを訴えている人達と、どのような違いがあると思いますか。

何が良くて、何が悪いのか、何が本物で何が偽物なのか、あなたは何を基準に判断されますか。

あなたが本物だと信じて疑うことのなかったものが、ある日突然、

それは偽物だったと知ったとき、どうしますか。

どうでもいいようなことや、どちらに転んでもそんなに大差はないと思われることならば、ああ、そうか偽物だったのか、世の中こんなものだとなるでしょう。

しかし、私が言っているのは、自分の根幹に関わるもの、または、関わることで、それは偽物だと知らされたらということなのです。

端的に言えば、自分というもの、自分という存在、今、自分が自分だと思っている思い、そういうものが、実は偽物だったとなったならば、どうしますかということなのです。

まさか、それが偽物だったなどと、簡単に思えません。

今の自分を自分だとすることに、誰も疑ってはいないでしょう。

人も自分も、目に見えている自分達（物体）を指して言っていることなど当たり前です。どんなこともそこから出発しています。言うこと、すること、みんなそうです。

世の中は、それを基準にして動いています。

自分達（物体）の幸せと喜び、繁栄のために、尽力しているので
す。

それがこの世の流れです。

その流れを根底から覆すものがあるとするならば、それは、もはや天変地異しかないことは、薄々感じてきているのではないでしょうか。

ところで、肉の自分を喜びに誘うものは、たくさんありました。

まず、自分というものを認めさせることに無上の喜びを感じていく、これは肉を持ってきた人間として、ごく当たり前のことだと思います。

肉を崇めよ、我を見よ、今となつては、その哀れさをつくづく感じる場所ですが、肉という形を本物として生きる者にとっては、これほどの榮譽はないのです。

本当の自分を見失って、ずっとさ迷い続けてきたという事実、現実と真向かいになることを、恐れてきました。

人間とは、そういうものだと思います。

しかし、自分と真向かいになれずにいる、偽物の自分しか知らう

としない、これでは、どんなに頑張ったところで、絶対に幸せになることはない、それが、学びと出会い、田池留吉氏と出会った私の出した結論でした。

己の欲心のままに、長い間、神、仏に代表される目に見えないパワーの世界を、自分の外に求め続けてきた私達です。

願いを込め、祈るといふことの間違いや恐ろしさを知らずにきたのです。

何かあれば、ふと祈りが心に上がってきませんか。

救いを求める思いはありませんか。

何か、摩訶不思議なパワーを期待していませんか。

実は、それらの思いは、みんな本当の自分を忘れ去ったところか

ら発せられるものなのです。

本当の自分を忘れ去って、手を合わせたり、祈りを捧げたりして
いくのです。

いったい、何に向かって、手を合わせ、祈りを捧げているのか考
えたことはありませんか。

ないでしょう。

手を合わせ、祈りを捧げることがいいことだと思っているからで
す。

その行為、いいえ、それをする自分の思いは、自分を冒流ぼうとくしてい
る思いなのだということに、気が付いていません。

それは、自分自身が何者であるのかを知らずに、今まで存在して

きた証拠だとも言えるでしょう。

眞実を見つめて

偽装、偽装で世の中は大騒ぎしていますが、これは今に始まったわけではありません。

これまでの私達の歴史を振り返れば、すべてが偽装で覆い尽くされてきたのです。

偽装に気が付かずにやってきただけのことでした。

私達は、自分が何者であるのか、自分がどのような存在であるのかを全く知らずに、偽物の自分を土台に据えて、時間を積み重ねてきたのです。

自分自身が偽装に過ぎなかったという結論は、誰にも出せませんでした。

偽装の中で、幸せや喜びを求めてきたことや、愛を語り、正義を唱え、平和などを求めてきたことに、誰一人気付ける人はいませんでした。

当然、いくら奮闘努力をしても、世の中はますます混迷の度合いを増してくるのです。

どこかおかしいのではないか、何か狂っていると、人間の心の暗部が、分かりやすい形となって現象化してきていることを感じている人もあると思います。

ニュースといえば、暗いニュースばかりです。

人を騙したり、殺したり、金の奴隷に成り果ててしまった人間の姿が、毎日のように報道されています。

それは当然といえ、当然の結果です。

そこで、「何かまともなことはないのか。あれも偽物、これも偽装、せめて、我々だけでもまっとうに生きていこうではないか」と思われている人もあるかもしれません。

そうであるならば、自分自身が偽物だった、本当の自分を知らずに偽物の自分を自分だとしてきたことを、どうぞ、まず知っていただく下さい。

自分達が偽装であることに気が付く、これが私達の最大かつ唯一の難関です。

この難関を突破しなくては、私達は、まっとうに生きていくことはできません。

今、私達が感じている幸せも喜びも、そして、正義や愛や平和も、みんな偽装の上に成り立っているものなのです。

偽装は偽装であって、本物ではないから、いずれそれらは偽物であることを暴露していきます。

どのように現象化していくかは、色々なパターンがあると思いますが、それらは見せかけのものであったことを、必ず示してくるのです。

「何を根拠に、そのようなことが言えるのか。」

それは、私達自身が、真実を知っている、本当の自分とはいかなるものなのかを知っているかとしていられるからです。

もちろん、ここで言う「私達」というのは、肉、形の私達を言っているわけではありません。

世の中の流れという言葉があるように、それは「流れ」と表現したほうが分りやすいでしょう。

真実を知りたい、知っている、知っていくという流れです。

私達は、その流れの中にあるのです。

その流れそのものが、私達なのです。

従って、気付きの促しは、これからますます起こってきます。

自分が自分を促していくのです。

そのためには、偽装、それを土台にして作り上げられたものが、表面に現れてきて、それらがみんな崩れていかなければなりません。そうです。これから、偽物は、どんどんどんどん崩れていく方向に進んでいきます。

私達には、その作業、工程が必要なのです。

そして、偽装の上には、偽装の世界しか築けなかったことを、それぞれが心で気が付いていく必要があるのです。

偽装の世界は、泡と化して消え去っていく夢幻の世界です。

夢幻の世界をつかんで、消えないでくれと祈りを捧げても、それは全くバカげていたことだったと、いつ、どこで、どのようにして気付いていくのか、それが待たれているのです。

人間は、神とか仏とか、いわゆる摩訶不思議まかふしぎなパワーを貪欲に求めてきました。

それらを、自分達人間とは別格の存在だととらえてきました。

パワーを求める心、ひれ伏す心、畏怖いふする思い、それらの思いを神や仏や宇宙のパワーと呼ばれるものに対して、どんどん向けていったのです。

それがどれだけ愚かで無知なことなのか、自分自身を冒瀆ぼうとくする思いであるかということは、偽装の世界の中では、絶対に分からない

ことでした。

神に祈りを捧げる、忠誠を誓う、仏の道に精進する、どれもこれも全くの間違いでした。

その間違いは、

人間とは、肉体という形を持っているものだという発想から来るものでした。

これが完全なる誤りなのです。

人間には、形がないのです。人間は、もともと目に見えないものなのです。

しかし、現実には、みんなそれぞれに色々な身体的特徴があります。

目に見えないものが、目に見える、識別できるものを持つてくることに、大きな意味があるからです。

その意味を、みんな履き違えているだけのことです。

では、目に見えないものが、なぜ、肉体という形を持つのか、持つには持つだけの意味があるのなら、それはどのようなものなのかということが、あれも偽物、これも偽物となっていく中で、段々に際立ってくるかと思えます。

ここで、提案をします。

偽物の自分の幸せと繁栄のために、全力を注いでいく生き方に、もうそろそろ終止符を打ちませんか。

さらに、次の三点を考えてみてください。

何のために生まれてきたのか。

なぜ今があるのか。

本当にこのまま死んでいいのか。

自分の生き方を方向転換する時が、どなたにも必ずやってきます。

ただし、それは、世に言うところの生き方の方向転換というのと訳が違います。

それらのノウハウは、もうすでに世の中に溢れ返っています。

いかに生きるべきか、どのような人生を歩んでいくべきか、名言

格言、その術すべは、言い尽くされています。

それらは、ある程度、参考になるかもしれませんが、それもまた、偽装の世界の中でのお話に留まっているとお伝えしなければなりません。

焦らなくてもいいと思います。

じっくりと世の中を眺めていけばいいと思います。

これから、日本の国が、世界の国々がどのようになっていくのか、ひいては、地球そのものがどう変化していくのか、そう遠からず、私達の目に、耳に、届けられることでしょう。

日の出の勢いのように栄えているように映つても、所詮、それら

は、偽装社会の中の出来事です。

だから、その繁栄は、何かのきっかけで、簡単に崩れていくのです。

形が崩れて、内部の汚さ、醜みにくさが白日のもとにさらけ出されます。自分達の目の前に展開していく現実を通して、自分達の愚かさ、無能さを知っていく運びとなっています。

そして、それに拍車をかけていくのが、天変地異です。

そのようなことを経て、私達は、自分の外に求めてきたものの限界を知っていきます。

形は、神を捨てる、信じていたものを捨てていくということになるでしょう。

捨てるといっても、簡単に信じてきたものを捨てることはできません。

捨てざるを得ないというほうが妥当です。

何を信じてきたのだろうか。

何を信じていけばいいのだろうか。

この過渡期は、大変な時間です。

大変な時間を経て、ようやく、人間は、自分の中に思いを向け始めます。

自分とは、いかなる存在か。

一瞬のうちに、ことごとく消失してしまう現実を前にして、

茫然自失ぼうぜんじしつの状態の自分があるでしょう。

現実を受け止める以外にありません。

完全にお手上げの状態です。

しかし、そこからです。

そこから、私達は出発していくのです。

肉、形を本物とする思いの中で、必死に目先だけの幸せを追いかける毎日であれば、本当にそのようなことが起こってくるのかとい

う思いもあって、今はまだ、非現実的なことでしかないと思います。

人生は一度切り、人間、死ねば終わりという思いは、人間の心の中に根深くある思いです。

だからこそ、今を大切に、命を大切にということでしょう。

そして、大切な今という時を奪うもの、大切な命を奪うもの、それは、自分達の敵でしかありません。

敵とは戦って、勝利しなければなりません。

戦いのエネルギーを出し続けていきます。

これが、今までの私達のやってきたことです。

正義を旗印に、戦いのエネルギーを流してきました。

愛を求めて戦い続けてきましたし、平和を願いながら、戦いの工

ネルギーを流してきたという矛盾の中にもあったのです。

そのような私達のあり方に、完全にノーの判定が下ります。

それが、これからの時間だと、私は感じています。

愛と死を語っていけば……

思いを語っていけば、愛と死の真実の向こうにあるものは、大きな愛のエネルギー、力強い波動、喜びのエネルギーに直結していくことを感じます。

そのエネルギーは、学びを進めていつている人達は、天変地異という形で示されていくことは、ご承知です。

そうです、愛と死を語っていけば、天変地異に繋がっていきます。私達と天変地異は切り離せないものだという思いが、私の中にしつかりとあります。

愛と死を語っていけば……

そして、その天変地異のエネルギーの源には宇宙があるのです。

私は、ずっと以前より、宇宙ということに自分の思いが向いていました。

自分の心を見る、そして、瞑想していく中で、自分と宇宙とかUFOとか、天変地異とかは切り離せないものだという感覚があります。

私は、自分は特別だとかそういう思いはありませんが、どういうわけか、宇宙を感じていきたい、宇宙を感じていくことが自分を感じていくことだという思いを強く持っています。

まだまだ、周りを見渡せば、時期尚早だということも分かっ

ますが、私自身は自分の中の宇宙と、もっと深く対話していこうという思いがあります。

そのために、今世の私の時間を整えてきました。

そして、肉という形を持てば、その形の自分にとらわれていくことは必至です。

しかし、肉という形を持たなければ、真実の自分をしっかりと心で知ることができないのです。

それを知った上で、今、こうして肉を持ち、自分の周りを整えてきたことを感じるからこそ、私達は流れの中にある、流れそのものが私達でしたという思いを強くしています。

肉という形にとらわれ、いかに他力のエネルギーのほうに心が引

っ張られようとも、真実に目覚めていくという、私の中の思いは、根強く、根深く息づいていたことに、心から感謝します。

生まれることと死んでいくことの転生の中で、自分の本質と出会っていく計画を、繰り返し立ててきたことを確認しています。

何で生まれてくるのか、何で死んでいくのか、何でこうなるのか、全部、自分の計画の中の出来事でした。

自分はみんな知っていたのです。

本当の私は、懲りることなく、「あなたは私としか生きていけない」と、何度も何度も伝えてくれました。

自分を信じてくれていた存在、自分を愛してくれていた存在、それがあった、これは、決して消えることのない事実でした。

私は、その自分とともに生きていくことを、今世の時間に誓ったのです。

本当の自分とともに生きることが、私の真実だったことを知ったからです。

私達は、生まれてきた時点から、何もなしでは生きていけません。着るもの、食するもの、住むところ、最低限度、それらを要します。

その上に、まだまだたくさんものを求めていきます。

生まれてきたからには、幸せになりたいと思います。

実り多き人生、幸せな人生、誰しもが望む思いです。

どうなればそうなるのかということは、人それぞれの思いや考え方があってしょうが、根本は、みんな幸せになりたいということだと思います。

しかし、幸せとはどういうことだろうかと考えたときに、私は、やはり人間というものは、幸せの本当の意味を知らないで生きてしまったというところに、行き着くのです。

幸せも喜びも、みんな自分の外にあるものだと思つて、懸命に求めてきたのです。

それは、自分が幸せを感じ、喜びを感じるときは、どんなときなのかと、自分に聞いてみれば、答えは自ずと出てくると思います。

大抵は、幸せを感じ、喜びを感じる何かが必要になつてくるので

す。

これがあるから、あれがあるから、ということだと思えます。

しかし、こういう人もいます。

「何もなくても幸せ、喜びです」

果たして、どうでしょうか。

「生かされている喜びを感じて、感謝の思いが出てきます」という人がいたならば、私は、その人に聞いてみたいのです。

「あなたは、自分を知っていますか」

「あなたは、何によって生かされていると思っていますか」

きつと満足する答えは、返ってはこないでしょう。

「神に感謝」、「神のご加護を」、「仏の慈悲」、そのような言葉を出す人にも聞いてみたいのです。

「神や仏とは、いったい何を指して言うのですか」
これも同じでしょう。

誰にも答えることはできないと思います。

真実に出会った人などいないからです。

神や仏や宇宙のパワーは、自分達とは別世界のものであり、その世界は、自分達のずっと上にある世界だとしてきた人間にとって、真実の世界を自分の中で知っていくことは、生易しいものではありません。

無病息災、平穩無事を希こいねがう思いが、いかに無知で欲であるのか、愚かなことであるのか、人間はどうしたら気付いていくことができるのでしょうか。

ご先祖様が見守ってくれる、天国から見守ってくれている、このような思いが、全く間違っている、バカげているということに、どうしたら気付けるのでしょうか。

救いを求めても、祈り続けても、どうにもならない状況に我が身を置く以外に方法はないのでしょうか。

私は、そう思っています。

それ以外に方法はないと思っています。

人間は、本当の意味で、裸にならなければならないのです。

もちろん、着ること、食すること、寝る場所の最低限度はあつても、「自分の心ひとつで、自分と向き合う」時を迎えなければならぬのです。

祈って祭って、献金して、それで幸せになれると思つてきたこと、幸せにしてくれと要求してきたこと、みんな間違いでしたとなつてこなければなりません。

そうなつてくるまで、容赦なく気付きの促しが訪れてきます。

本物の愛のエネルギーは、優しいがゆえに厳しいのです。

容赦はありません。

1 + 1 = 2 であつて、1 + 1 ≠ 3 だ、絶対に3にはなり得ないことを伝えてきます。

ⅡとⅢは、はっきりと違うことを伝えてきます。

人間は、自分達の世界の中では、ⅡとⅢは、はっきりと違うことを知っていても、ⅡとⅢは同じになるようにしろと要求したり、そうなるように仕向けていたりしていくのです。

それが、形の世界の現実であり、常識なのでしよう。

しかし、真実、波動の世界は、その現実も常識も一切通じない世界です。

そして、その世界に、本来私達は存在しています。

本来の私達と、そうでない私達とのギャップがあり過ぎて、今まで、真実は遠く彼方にありました。

それを、今、私達の目の前に引き寄せてくれて、どうぞ、この真

実の世界を知っていつてくださいと伝えてくれているのです。

今は、そういう時です。

学びを知った人は、今がどういう時であるのか、これからどのような時を迎えていくのか、薄々でも感じておられるのではないでしょう。か。

まだまだうすらぼんやりと感じていることも、やがて、それは、もう少ししつかりと感じてくると思います。

様々な出来事、色々な人達から、自分の心に伝わってくると思います。

だから、今は、ただ淡々として瞑想をする時間を重ねていけばいいのです。

思いに忠実に……

思いが上がってくるままに認め、ここまでやってまいりました。したた

失礼ながら、書き記す内容は、頭で理解できるような内容ではありません。

自分達の生活と直結しているような内容ならば、読んでそうだと頷いていただけるかもしれませんが、残念ながら、本書はそのような内容ではありません。

そのような内容は、私自身綴れないのです。

また、綴ろうという思いもありません。

分かり易くしよう、どうすれば、私が言おうとしていることを伝えることができるのかと思うことがあります。そういうときは、さっぱりとキーが打てないのです。

しかし、いつの日にか、心で理解していただけるだろうと思いつつ、私は、やはり、自分の心に伝わってくる私自身の思いに、忠実になります。

『宇宙は、存在します。』

宇宙は、私達の心の中に存在する喜びのエネルギーです。

その喜びのエネルギーが、これから大きく出現していくのです。

天変地異は、決して避けることのできない現実です。

天変地異を喜びで受け止めていってください。

私達は、母なる宇宙へ帰る喜びのエネルギーなのです。

母なる宇宙が、私達に戻ってきなさいと伝えてくれています。

私は、その思いに忠実に、その思いに沿って、これからの時間を
過ごしてまいります。』

塩川香世（しおかわかよ）

1959年3月大阪市に生まれる。

1991年3月税理士登録。

税務関係業務に従事、現在に至る。

著書／「ありがとう」意識の流れ姉妹編

「母なる宇宙とともに I」

「母なる宇宙とともに II」

「意識の転回」

「愛と死の真実」

2008年4月15日 初版第1刷発行

著者 — 塩川香世

発行 — **UTAブック**

発売元 — **株式会社 かんぼう**

大阪市西区江戸堀1丁目2番14号（〒550-0002）

電話 (06)6443-2171 FAX (06)6443-2175

印刷／製本……モリモト印刷株式会社

©Kayo Shiokawa, Printed in Japan 2008

乱丁本・落丁本はお取替いたします。